

3月29日 (日) 民数記 33章	「祭司アロンは、主の命令によってホル山に登り、そこで死んだ。イスラエルの人々がエジプトの国を出て第四十年の第五の月の一日であった」(38節)。一度は自分もモーセと同じように主のみ言葉を取り次ぐ者と主張したアロン。しかし主の戒めに従い、主から託された務めに仕えて祭司として死んだ。主の求めを真摯に聞き、主に仕える歩みを祈り求める。
30日 (月) 民数記 34章	「あなたたちにこの土地を嗣業として分け与える人の名は、次のとおりである。すなわち、祭司エルアザルとヌンの子ヨシユアである」(17節)。主は、イスラエルの数々の離反、反抗をその都度赦してくださった。それでもやはり、モーセを含め、エジプトから導き上った民が嗣業の地に入ることを許されなかった。すでに七の七十倍赦されていたのだろうか。
31日 (火) 民数記 35章	「町は、復讐する者からの逃れのために、あなたたちに用いられるであろう。人を殺した者が共同体の前に立って裁きを受ける前に、殺されることのないためである」(12節)。主は、常に正しい裁きが行われることを願っておられる。それは、復讐する者をも、罪を負うことがないように！という願いでもあるのではないだろうか。
4月1日 (水) 民数記 36章	「イスラエルの人々の諸部族の中で、嗣業の土地を相続している娘はだれでも、父方の部族の一族の男と結婚しなければならない」(8節)。主が、イスラエルの人々の名を呼び、数えられるのは常に男性だけだったが、ツェロフハドの娘たちの名は聖書に残された。嗣業の土地を部族の中に残すため、同じ部族で気に入ってくれた男の妻になる定めのため。

2日 (木) 申命記 1章	「しかし、あなたたちは上っていこうとはせず、あなたたちの神、主の命令に逆らって、天幕にとどまって不平を言い合った。『主は我々を憎んで、エジプトの国から導き出し、アモリ人の手に渡し、我々を滅ぼそうとしておられるのだ』(26・27節)。人は、決して主の思いの深さ、広さ、豊かさを知ることはいできない。そのことを思い知らされる。
3日 (金) 申命記 2章	「あなたの神、主は、あなたの手の業をすべて祝福し、この広大な荒れ野の旅路を守り、この四十年の間、あなたの神、主はあなたと共におられたので、あなたは何一つ不足しなかった」(7節)。日々の暮らしが守られていること、豊かな恵みの内にあること。それはやがて当たり前になり、感謝を忘れ、次第に「更に、もっと！」と求める思いが芽生えてくる。
4日 (土) 申命記 3章	「『あなたのように力ある業をなしうる神が、この天と地のどこにありましようか。どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください』(24・25節)。主の言葉に従い、民の離反に怒りを示される神に執り成しを祈り続けたモーセが、主の導きの成就をその目でみたい！と望むことに共感する自分がいる。
5日 (日) 申命記 4章	「しかし主はあなたたちを選び出し、鉄の炉であるエジプトから導き出し、今日のように御自分の嗣業の民とされた」(20節)。「食べ物が無い」と不平をぶつけた荒れ野の旅がようやく終わる。しかし「乳と蜜の流れる地」の暮らしには、富と力の誘惑という別の闘いが待ち受けていた。それゆえモーセは民に「主の慈しみの選びと伴いの原点を忘れるな」と語りかける。